



Title	納板河流域国立自然保護区における人々と水利用
Author(s)	宇都宮, まゆみ
Citation	GLocolブックレット. 2013, 11, p. 27-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48283
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

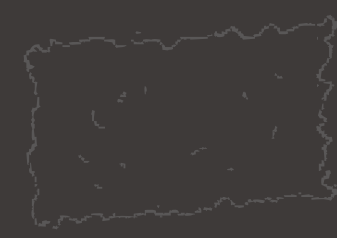
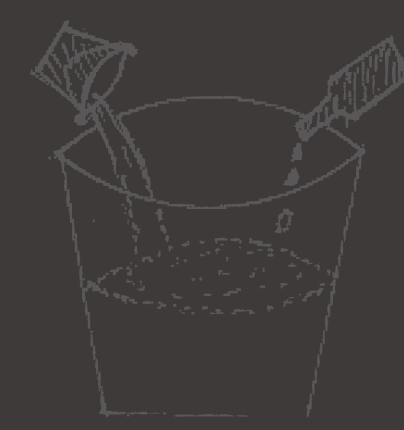
中国共产
党
西双版纳
市嘎洒镇

纳板村



【第1部】

西双版纳



納板河流域国立自然保護区における人々と水利用

宇都宮まゆみ 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程

1. はじめに

ここでは2012年8月6日から8月8日にかけて納板保護区を訪問した際の聞き取り調査に基づき、納板保護区に住む人々の水利用の事例を紹介する。

今回の聞き取り調査において人々から「水は命の源である」といった言葉が聞かれたように、水は人間の生活にとって欠かせないものであり、まさに命を育むものである。また、農業を営むこの地域においては、水がここに住む人の生存基盤を支えるものであるということは容易に理解できる。そして、森林は水の貯蓄機能を有しており、水は森と密接な関わりを持っていることは説明するまでもないであろう。しかしながら一方で、雲南省は中国の中では比較的森林減少が少ない地域であるものの、森林率(森林が占める面積)が1950年代においては55～60%であったのに対し、90年代には24.38%と記録されているように、ここ50年の中で同地域において森林が減少していることが報告されている(阿部1997)。そして、水源を支える森林に関して更に述べると、今回の調査地となる雲南省西双版纳においては植生なども含めた著しい環境の変化がみられている(深尾2004)。

わずか50年の間に西双版纳において歴史上かつてなかったほどの変化が起きており、その変化を与えたひとつがゴム栽培である(深尾2004)。また、今回の調査に多大なる協力をして頂いた納板保護区の王東昇さんによると、国有林と集体林は自然のままであるが個人所有林はほとんどゴムに変わったという話も聞かれた。実際に筆者が同地域を訪問した際にも、広大なゴムプランテーションやバナナプランテーションが観察されている。従って、本論においては同地域における人々のあり方を理解するため

水利利用の事例に着目することが有効であると考えた。

また、近年、豊かな植生が育む生物多様性ゆえに納板保護区は「環境保護」の対象として、政府からの関心を集めている。納板保護区の成り立ちに関する詳しい説明は本書の思沁夫「西双版纳について」を参照していただきたいが、ここで少し、今回の訪問の中において納板保護区のスタッフから聞いたこの地域における保護の原則に着目し紹介をする。保護員の方の話によると、納板保護区での保護の原則は、今まで持っている土地の生活慣習を守ることである。そして、納板保護区の人、住民を教育することはできるが強制はできないと話した。つまり、人々の生活を尊重しながら自然を守っていくということを原則としていえると考えられる。そして、この納板保護区における「環境保護」活動の原則は、単に自然を守っていくという「保護(protection)」を意味しているというよりは、人々の自然利用を前提とし人間が自然を利用しながらいかに自然を守っていくのかという「保全(conservation)」という考えに基づいていると捉えることができる可能性がある。また、保全という観点から環境問題について考えた際に、赤嶺(2005)の提唱する地域環境主義¹という視座に立って同地域の「環境保護」活動と人々のあり方を考察することが有効であると考ええる。

従って本論では、聞き取り調査に基づいて水の利用の仕方をテーマに据え、村の人々の環境の変化の捉え方やそれに対してどのように対応してきたのかを、村の人々の視点に着目し考察を行う。そして、本機会においては急激な変化の中で人々がどのように生活してきたのかに対する理解を進め、今後の機会において地域環境主義という観点から、納板保護区の現状をどのように捉えることができるのか、本保護区の事例からどのようなことが学べるのかを描くための一助としたい。

1 赤嶺の提唱する地域環境主義とは、その場所に住む人々の価値観、生き方を考慮した資源管理を提案するためには、地球規模の人類を対象とするのではなく、地域において、個別の、人びとの顔を想定しながら資源管理に関わる作業をすすめていくしかないという視座に立ち、地域住民の価値観を重視した資源管理の模索を行うことを意味する。

2. 納板保護区における事例

傣族 納板村の事例

まず初めに2012年8月6日に訪れた傣族の村である納板村の事例を紹介する。同村は43世帯188人が生活しており、41戸が傣族、2戸がラフ族の村である。また、本村においては車を所有する世帯も観察され、現金収入の高い世帯の存在が確認できる。インタビューに答えてくれた村長さんによると、彼の家族は母の3代前からここに住んでいたそうであり、移住時期はここ200～300年の間の移住が考えられるのではないかと推測される。村長さんによると、20年ほど前から政府がゴムの栽培の導入を行っている。基本的に最初のゴムを作った際はゴムの収入は低かったため、水稻が行われていたそうである。しかしながら、2005年からのゴムの値段の上昇に伴い、田んぼを人に貸しゴム栽培に携わる人が増えているそうである。そして、現在においてはゴムの汁の収穫を温度の低い時間にすることが適していることから、夜にゴム林に仕事に行くというゴム中心のライフスタイルが見られている。森林保護局の副センター長によると、森林の保護に関し2003～2009年が一番苦労したとの話で、ゴムの値段が上がったので個人の森が伐採されたとのことであった。この人々の主な収入源はゴム栽培のようであり、他にたけのこや山菜も加工しているそうである。インタビューによると野菜はあまり作っておらず、野菜の栽培は面倒であり、村に売りに来る人がいるので買うといった話が聞かれた。また、ここ2、3年においては広西チワン族自治区からバナナのプランテーションも入ってきている。

そして、この地域の水の管理について述べると、社会主義時代に水の管理に関する仕組みなどが壊されたようであった。また、村の掟により水源の森(水辺の森)は伐採していないということが聞かれた。川の利用の仕方について質問すると、魚を取り、そして川沿いの植物を利用するとのことであった。また、この村においては川の水を利用して稲作が行われている。また、インタビューにおいて「自身が子どもだった頃と比べて何が違うか?」という質問に対し、昔は油がなかったので魚を食べていたという答えが聞かれた。そして、現在はあまり魚をとって食べないようである。

この村においては後述のラフ族の村の事例のように水の変化

に関する発言や水と森に関係する話をあまり聞くことができなかった。その理由のひとつにインタビューにおいて多岐に渡る質問をしたことも挙げられるが、もうひとつの理由としては本村における水と人との関係性の違いが挙げられるのではないかと考えられる。また、周囲にゴム園ができたことで地表水の流れが変化したことによって傣族は井戸水に頼らなければならなくなり、生活の中で維持してきた森や水との関わりも変化していると指摘されている(深尾 2004)。つまり、今回のインタビューの中で川との関わりが少なくなっていることが推測されるような発言がみられているが、山のふもとである同地域においては開発の進む中で自然との関係性も変化しており、従って同保護地区において自然との関係性の中で人々の暮らしぶりを捉えきれない部分があると理解できるのではないかと考える。つまり、現在、同自然保護区においては人々の従来の習慣を尊重しながら自然の保全が謳われているが、人々の生活の中で、従来、自然の中で確保し生活のために使っていたモノが新たなモノによって代替えされ、人々の生活や自然との関係性が変化していることが理解できる。従って、今後、この地域において、上記の様子についても詳細に記録し描いていくことが必要であると考えらる。



写真1: 納板村訪問時の写真。同村においては車を所有している世帯も見られた

ラフ族 大糯有村の事例

次にラフ族大糯有村の事例を紹介する。インタビューには現在、自然保護区の保護員の男性、以前、学校の先生をしていた保護員の方のお姉さんである51才の女性、そして若い保護員の方が協力してくれた。この村には97世帯416人が生活しており、全員がラフ族である。その内、40世帯がゴムを中心に生計を立てており、茶畑もしている。97年からゴム栽培が始まり、2002年からはほとんどの人がゴム栽培に携わるようになったようである。インタビューの方によると71年にここに定住したとのことであり、この地域での定住が比較的近年であることが理解できる。彼らによると、山の生活は不安定であり、ここでは農業が可能なので定住したとのこと、昔は7～8キロ離れた大きな山にいたそうである。この村においては全ての家が田んぼを所有しており、多い人で7～8畝(ム)、少ない人では3畝(ム)ほど所有

しているとのことであった。昔は狩猟やイモ類、トウモロコシ、茶、米をつくり生活をしていたとのことであった。

水に関して話を移すと、昔は森が生い茂り、水が絶えなかったという話が聞かれた。インタビューによると、昔は水が豊富で魚がたくさんいて、それを取って食べていたとのことであった。また、植物もたくさん使っていたそうである。インタビューの中で自然林について聞くと、現在、森の全般において個人のゴム林が広がっており、水源の周りだけは自然のままに残しているという

ことが聞かれた。インタビューは家の外に椅子を並べ話を聞かせてもらうというかたちをとっていたが、この話をしている時にインタビューーに前の山を見えるように言われた。この調査において非常に印象的だった光景のひとつと言えるが、写真2にみられるように見事に水源の周りだけ原生林が残されているのが観察された。ちなみに山の上部が集体林であり、右側の原生林の上部は茶畑となっている。



写真2: 水源の周りだけが原生林が残されている

これに関して、自然科学的にどう評価できるのかはここでは検討しないが、いずれにせよ人々の水源に対する意識の強さがこれより理解できるであろう。そして、「どうして、水源及び自然林を残

したのか?」という質問に関しては、水源の周りの木を切ってはいけないといったような習慣があり、罰金を取られるからという答えが聞かれた。そして、村の行政的な規定以前にも、水は大事な命の源であるので水源の周りは切らない習慣であったという風に言われた。

しかしながら、この点に関し2つの疑問が挙げられる。ひとつは、なぜこの地域の人びとがこのように水源を守ることに執着したのかということである。執着という言葉が適切でないかもしれないが、写真からも見てわかるように単一の作物を植えた畑が広がる中で水源の周りと言われる部分だけ原生林が残されている。なぜこのようにきっちりと水源の周りだけ手がつけれなかったのかという点に関しては今後、更に考察していく必要があるであろう。今回の調査が短期間であったことより、ここでは推測に留まるが、ラフ族は前述の傣族より上に住んでおり、移住の年代も比較的新しいことから、他民族との関係性の中で水源の保護の必

要性あるいは保護をしていると語るに迫られたのではないかと考える。今回のインタビューにおいては下記で詳しく説明するが、他の民族とのトラブルがなかったという風に説明を受けた。しかし、そのような発言からも今後の調査の中で多民族間の関係性についても考察していく必要性があると考え。また、目に見てくっきりと水源の周りと言われる部分だけ原生林が残されているようであるが、その自然林を残しておく範囲と言うのがどのように決められているかということも興味深い点である。これに関しては、保護区の現状を詳細に理解するためにも今後の調査課題とするべきであろう。

また、2点目に水源の保護に関し、水は命の源であり水源を守るのは昔からの習慣であるという発言に対して、今後、更に考察を加える必要があるのではないかと考える。インタビューーの家族の移住時期は1971年であり、現在から遡っても40年ほどの居住年数と言えよう。つまり、ここで言う「昔から」という言い方に着目することが重要なのではないかと考える。昔からというのはいつ頃からのことを示しているのか、また現在の村での定住が比較的新しいことであるのに対しなぜ昔から水源を守ってきたという言われ方がなされたのであろうか。そもそも71年にここに移り山の生活から農業を始めるようになったというように聞いたが、彼らの父母は定住という暮らし方をしていたのか、もし、定住ではなく移動を基本としていた生活をしていたならばひとつの水源を守るという習慣があったのかということに疑問が提示されるであろう。この点に関しては、「自然保護」が掲げられる近年において、人々が自身の経験を振り返る際に、近年に取りざたされている考え方や言い方を用いて自分たちの過去を語っている可能性も考えられるのではないかと予測する。また、潘丙村に住むハニ族の老人からは70年代のダム建設に伴い、水源をそちらに頼るようになってからは山を守るという姿勢が薄れていったという発言が聞かれていることが報告されている(深尾: 2004)。

しかしながら、ここはラフ族の村ではあるが同保護地域内の事例として参照するのであれば、この地域では水源に対し保護する必要があり、それは昔から守ってきたという言い方がされているが、実際の現状がどのようなものなのかを理解する必要があるであろう。つまり、今後、この地域での人々の暮らしりと水との関係性に関し観察も交えた上で聞き取りを行い、上記で

考察した事項に関し再考する必要がある。また、水の汚染について聞くと、水の汚染を感じたことはなく前と同じおいしさであるというインタビューーは答えた。水の汚染に関して、視覚や嗅覚ではなく味覚で捉えている点で非常に興味深いのではないかと考える。今後のインタビューにおいては更に質問を重ねる中でこの人々の自然の認識の仕方に対しても理解を深める必要がある。そして、水の汚染は感じられないとされている一方で、明らかに水の量は減っているそうである。「水が減った理由はなんだと思うか?」という質問に関しては、単純な理由で木を切ったからであり、農地を作ったからであるという答えが聞かれた。ここで言う農地というのが具体的にどこを指しているのか、つまり自分たちが開拓したそのものを指しているのか、他の人々の集団のものを指しているのかは今回の聞き取り調査においては聞くことができていない。この点に関しても、今後、詳細に人々から話を聞いていく必要があると考える。

また、水量の減少に関して述べると、雲南省におけるダム開発は著しいものであり、その危険性が指摘されている(畢: 2005)。ここでは地理的な要因よりダムと彼らの水源の水の現象を説明することはできないが、今後、人々の感じる環境の変化について、人々の視点から理解し描くと共に外部要因の変化を重ねて説明しまた理解していく必要性はいうまでもないであろう。そして、インタビューーの話によると、今まで他の民族とトラブルになったことはないとのことであり、自分たちが下りてきたころにはまだ森であったというインタビューーは話した。水が減って困ったこととしては、農業に使う水が足りなくて、田植えの時期が遅れることがあったという声が聞かれた。ここには村のつくった水路があり、それぞれの取り分を決めているそうである。規定でもあるし、習慣として守っているとの話であった。村で水利権・習慣を最初から決めていたそうで、他の村とのトラブルが起こったことも今までないそうである。この点に関しても上記で述べたように他の村との関係性について今後、考察していく必要性が示唆されるのではないかと考える。

3. まとめ

以上においては傣族、ラフ族の2つの村の事例の紹介を中心

に今後の調査においてどのような論点を挙げることが可能か、また考察を深めることが必要かを紹介した。雲南の森林減少に伴い、森林破壊が問題提起され、実際に納板保護区においてもゴム植林が問題視されている。しかしながら一方で、上に挙げたラフ族の村においては水源の周りだけ原生林をきれいに残すという事例も見られ、「自然保護」が掲げられる中で人々の水源に対する働きかけが理解できるのではないかと考える。

今回の調査における制限の中で推論に留まる事項が多く、断定的に問題を提起することは難しい。しかしながら、今回の調査の中で聞かれた発言の中で言われていた水源を守るといったような「環境保護」という領域で使われる言葉の使用などに今後、注目していく必要があることを示唆できるのではないかと考える。また、魚をあまり食べなくなった事例や井戸水に頼るようになった事例などから、従来の自然林の産物に頼っていた人々の生存基盤が観察されるのではないかと考える。今後、この地域における自然の「保全」について考えていくために、引き続きこの変化に関して詳細に研究を進めるべきであると考え。そして最後に、現在、納板保護区においては、村の人々と森林保護局の人々が正に自然の「保全」のあり方がどうあるべきなのかに向き合い実践を重ねているところであり、今後もこの地域から私たちが学ぶことが沢山あるということを強調して論を閉じる。

参考文献

阿部健一
1997 「雲南の森林史Ⅰ——中甸盆地の神山」『東南アジア研究』35(3)、422-444頁。

白坂 蕃
1997 「雲南における農業的土地利用とその地域的特色」吉野正敏(編)『熱帯中国——人間そして自然』古今書院、339-383頁。

深尾葉子
2004 「ゴムが変えた盆地世界:雲南・西双版纳の漢族移民とその周辺」『東南アジア研究』42(3)、294-327頁。

井上 真
2004 「自然環境保全のための『協治』」井村秀文・松岡俊二・下村恭民(編著)『環境と開発』日本評論社、75-93頁。

赤嶺 淳
2005 「資源管理は地域から——地域環境主義のすすめ」『日本生態熱帯学会ニューズレター』58、1-7頁。

畢 世鴻
2005 「雲南の開発——その問題と展望」『科学』75(4)、岩波書店、470-

474頁。
笹岡正俊
2012 『資源保全の人類学』コモンズ。

〈ウェブサイト〉
林野庁
http://www.rinya.maff.go.jp/j/suigen/suigen/con_1.html